

[授業科目名] E B N特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 北川元二、山田千佳子、早戸亮太郎
[単位数] 2	[必修・選択] 必修	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>【一般目標】 栄養科学の研究に必要な知識・技能・態度を修得する。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・論理的な研究の進め方を理解する。</li> <li>・栄養科学の研究における基本的な手法について理解する。</li> <li>・研究に必要な倫理指針について理解する。</li> <li>・研究を実践する上での安全指針について理解する。</li> </ul>			
<p>授業の概要</p> <p>「人間栄養」、「臨床栄養」、「食育・食行動・食環境」、「食品機能・食品安全」の研究領域ごとに、栄養科学の基本的な研究手法を理解することによって、栄養科学の研究を推進するために必要な基本的な知識、技能、態度を修得する。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>課題に対する取り組み、レポートの内容、受講態度について評価する（受講態度 20%、他を 80%として評価）</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>（人間栄養領域）〔早戸〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1回 人間栄養学研究の基礎知識</li> <li>2回 動物実験等の実施に関する基本指針</li> <li>3回 人間栄養学研究に必要な研究手法</li> </ol> <p>（食品機能・食品安全）〔山田〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4回 食品機能研究の基礎知識</li> <li>5回 食品安全研究の基礎知識</li> <li>6回 食品機能・食品安全研究に必要な研究手法</li> </ol> <p>（食行動・食環境）〔北川〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>7回 食育・食行動・食環境の研究に必要な基礎知識</li> <li>8回 食育・食行動・食環境の研究に必要な調査研究法</li> <li>9回 食育の研究手法</li> </ol> <p>（臨床栄養）〔北川〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>10回 文献検索法、データベースの利用法</li> <li>11回 統計学（基礎）</li> <li>12回 統計学（パラメトリック）</li> <li>13回 統計学（ノンパラメトリック）</li> <li>14回 疫学研究に関する倫理指針</li> <li>15回 臨床研究に関する倫理指針</li> </ol> <p>※担当者の都合で授業の順序が入れ替わることがあります。</p>			
<p>使用教科書</p> <p>特に教科書は指定しない。テーマ毎に参考図書、関連ウェブサイトを示す。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>研究の進め方に関する教科書を予習しておくこと。研究に関する倫理指針、安全指針をネットで検索し、読んでおくこと</p>			

[授業科目名] E B N演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 北川元二、山田千佳子、早戸亮太郎
[単位数] 2	[必修・選択] 必修	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>【一般目標】 栄養科学の研究に必要な基本的知識を理解した上で、研究を推進できる基本的能力を涵養する。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 栄養科学の研究に必要な代表的な英語論文を読解し、その内容を的確にプレゼンテーションできる。</li> <li>・ 研究に必要な倫理指針・安全指針に基づいた研究計画をたてることができる。</li> <li>・ 研究により得られたデータを、科学的・論理的に解析・考察できる。</li> <li>・ 研究に必要な英語力を修得する。</li> </ul>			
<p>授業の概要</p> <p>栄養科学の研究を推進するために必要な基本的な知識を習得した上で、実際に研究の一連の流れを理解する。栄養科学の研究の基礎となる英語論文を購読し、研究に必要な語学力を養う。</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>課題に対する取り組み、レポートの内容について、①研究計画立案能力、②データ解析・考察能力、③英語論文読解力、等の修得度を中心に評価する。受講態度 20%、他を 80%として評価する。</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1回 論文検索、エビデンス評価〔北川〕</li> <li>2回 研究計画の立案法〔北川〕</li> <li>3回 データ解析〔北川〕</li> <li>4回 調査研究に必要な統計学演習〔北川〕</li> <li>5回 実験結果の解析に必要な統計学演習〔北川〕</li> <li>6回 論文考察〔北川〕</li> </ol> <p>(英文論文購読)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>7回 栄養生理に関する英文論文演習〔早戸〕</li> <li>8回 栄養生化に関する英文論文演習〔早戸〕</li> <li>9回 栄養病態生理に関する英文論文演習〔早戸〕</li> <li>10回 食品機能に関する英文論文演習〔山田〕</li> <li>11回 食品安全に関する英文論文演習〔山田〕</li> <li>12回 食物アレルギーに関する英文論文演習〔山田〕</li> <li>13回 公衆栄養学に関する英文論文演習〔北川〕</li> <li>14回 食教育に関する英文論文演習〔北川〕</li> <li>15回 食育に関する英文論文演習〔北川〕</li> </ol> <p>※担当者の都合で授業の順序が入れ替わることがあります。</p>			
<p>使用教科書</p> <p>特に教科書は指定しない。テーマ毎に参考図書、関連ウェブサイトを示す。</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>各学会から出版されている Style Manual、統計学に関する教科書を予習しておくこと。</p>			

[授業科目名] 栄養生理学特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 下方浩史
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> <p>この栄養生理学特論では「食物摂取の調節」(Regulation of Food Intake)について、講義と演習を組み合わせで授業する。ヒトを含め生物はすべて外界から必要な食物を摂取して生きている。摂食行動は本能行動の一つであるが、その異常で肥満ややせを生じる。それらの予防と治療のためには、健康なヒトにおけるエネルギーおよび必要な栄養素の摂取調節機序について知っておく必要がある。</p> <p>食物摂取の調節中枢、影響する因子、摂食行動に関与する神経伝達物質やホルモン、調節機構などについて学び、摂食行動の基本的事項について説明できるようになるのが到達目標である。</p>			
<b>授業の概要</b> <p>摂食行動の中枢性ならびに末梢性調節、味覚等の食物感覚の影響、食欲の亢進物質および抑制物質、疾病と食欲、栄養素の摂取調節、なかでもタンパク質・アミノ酸の摂取調節などについて講述する(講義)。また、食欲に関する英文総説を輪読するとともに、受講生が各項目について文献を調べ、プレゼンテーションする(演習)。食欲に関する英文総説を適宜受講生が分担して輪読する。</p>			
<b>学生に対する評価の方法</b> <p>受講態度(輪読、発言、質問等)(40%)、プレゼンテーション(60%)から総合的に評価する。</p>			
<b>授業計画(回数ごとの内容等)</b> <p>下記の講義項目については、プリント、スライド等を用いて講述する。演習項目については、受講生がいくつかの項目を分担し、それらについて文献を調べ、Power Point 等で発表する。講義、演習の時間に、適宜輪読の時間を設ける。</p> <p>第 1 回(講義) 摂食の調節機構の概略と方法論  第 2 回(講義) 摂食行動に影響する因子  第 3 回(講義) 体重の調節機構  第 4 回(講義) 味覚と食欲  第 5 回(講義) 摂食の中枢性調節  第 6 回(講義) 摂食の末梢性調節  第 7 回(講義) 肥満遺伝子  第 8 回(講義) 栄養素の摂取調節(タンパク質ほか)  第 9 回(講義) 栄養素の摂取調節(アミノ酸)  第 10 回(演習) セロトニン、ヒスタミン  第 11 回(演習) レプチン  第 12 回(演習) オレキシン  第 13 回(演習) プロオピオメラノコルチン  第 14 回(演習) グレリン  第 15 回(講義) まとめ</p>			
<b>参考書</b> <p>特に教科書は指定しない。</p>			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> <p>栄養と行動の関連について興味をもって学習すること。  基礎知識として、脳の構造、神経伝達物質の作用、ホルモンの働き等について復習しておくこと。</p>			

[授業科目名] 栄養生化学特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 池田彩子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 1. 栄養生化学分野の専門用語を説明することができ、この分野のトピックスが理解できる。 2. 栄養生化学分野の課題を自ら抽出し、その課題に対してアプローチすることができる。			
<b>授業の概要</b> 本授業では、栄養素の中から、特に生活習慣病の発症や進展に関わりの深い糖と脂質を取り上げ、これらの代謝とその調節機構について生化学的なレベルで解説する。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 授業への取り組み方（50%）、およびプレゼンテーション（50%）により評価する。			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> 第1回 オリエンテーション 第2回 炭水化物（1） 糖質 炭水化物の消化と吸収 第3回 炭水化物（2） 炭水化物の代謝 第4回 炭水化物（3） 炭水化物の要求量と推奨量 第5回 炭水化物（4） 生活習慣病における炭水化物 第6回 脂質：吸収と輸送（1） 化学 消化 第7回 脂質：吸収と輸送（2） 吸収 輸送と代謝 第8回 脂質：細胞内代謝（1） 脂質生合成 第9回 脂質：細胞内代謝（2） イコサノイドの生成と制御 第10回 脂質：細胞内代謝（3） 脂肪酸の栄養必要量 第11回 脂質：細胞内代謝（4） 食事の脂肪酸と疾病のリスク 第12回 栄養素と遺伝子発現（1） 食事性脂肪 第13回 栄養素と遺伝子発現（2） ビタミンB12 葉酸 第14回 栄養素と遺伝子発現（3） ビタミンC ビタミンD 第15回 栄養素と遺伝子発現（4） 栄養とエピジェネティクス  ※第5、11、15回が演習、その他の回を講義とする			
<b>使用教科書</b> Present Knowledge in Nutrition 第10版			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 学部で学んだ生化学および基礎栄養学の内容を十分理解しておくこと。その上で、毎回の授業内容について、テキスト等を用いて予習した上で授業に臨む。理解が不十分なところがあれば、授業時間内に理解できるように努力する。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
運動栄養学特論		講義・演習	大嶋 里美
[単位数]	[必修・選択]	備考	
2	選 択		
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 競技選手や日常的に激しい運動を行っているアスリートは、栄養に関連した様々な健康問題やリスクを抱えている。それらを予防軽減すること、そして適切な栄養補給によりコンディションを整えることが、パフォーマンスの向上につながる。そのため本講義の到達目標は、アスリートの健康保持と競技力向上につながるエビデンスの蓄積やサポートに必要な知識および技術を身に着けることである。			
<b>授業の概要</b> 本講義ではスポーツ栄養学に関する基礎知識や、栄養マネジメントの流れに基づいた栄養サポートについて講義やエビデンスとなる論文の読解を行い学ぶ。また運動や栄養に関する各種アセスメント方法を演習や討論を通して理解を深める。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 参考文献の読み込みや討論への積極性を中心とする授業態度（60%）、課題提出（20%）、発表内容とプレゼンテーション（20%）などにより総合的に評価する。			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> 第1回 スポーツ栄養学と栄養マネジメントの流れを学ぶ（講義・討論）。 第2回 エネルギー・糖質摂取について学ぶ（講義・論文読解）。 第3回 たんぱく質・脂質摂取について学ぶ（講義・論文読解）。 第4回 水・ビタミン・ミネラル摂取について学ぶ（講義・論文読解）。 第5回 各種アセスメントの種類について学ぶ（講義・討論）。 第6回 身体組成の測定方法について学ぶ（講義・演習）。 第7回 運動機能・パフォーマンスの測定方法について学ぶ（演習）。 第8回 運動機能・パフォーマンスの測定方法について学ぶ（講義・討論）。 第9回 エネルギー消費量の測定方法について学ぶ（演習）。 第10回 エネルギー消費量の測定方法について学ぶ（講義・討論）。 第11回 エネルギー・栄養素摂取量の測定方法を学ぶ（演習）。 第12回 エネルギー・栄養素摂取量の測定方法を学ぶ（講義・討論）。 第13回 スポーツ栄養マネジメントの計画立案（演習）。 第14回 スポーツ栄養マネジメントの計画発表①（発表・討論）。 第15回 スポーツ栄養マネジメントの計画発表②（発表・討論）。			
<b>使用教科書</b> 必要に応じて書籍・文献を指示，資料を配布する。 （参考書①：体育・スポーツ指導者と学生のためのスポーツ栄養学 田口素子・樋口満 編著、 参考書②：健康づくりと競技力向上のためのスポーツ栄養マネジメント 鈴木志保子 著）			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 授業前までに、指定された参考資料を読み予習をしておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ライフサイクル栄養学特論		講義・演習	藤木理代
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> ライフサイクルやライフスタイルに応じた栄養ケアが行えるようになることを授業の到達目標とする。成長期、成人期、高齢期における健康・栄養問題の抽出と課題解決を、最新の研究・実践事例を用いて検討する。			
<b>授業の概要</b> 成長期については、学校給食と食育をテーマに、各地の実践例から現状と課題を検討する。成人期については、生活習慣病の一次予防法を最新の研究報告から検討する。高齢期については、体力の維持・増進法を、各自治体による取り組みの実践例や最新の研究報告から検討する。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 平常点（40％）及び課題レポート（60％）で評価を行う。			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> <b>幼児期・学童期の栄養ケア</b> 第1回（講義） 保育園、学校給食の実態と課題 第2回（演習） 保育園・学校給食の展望についてグループディスカッション 第3回（講義） 食物アレルギー対応給食の実態と課題 第4回（演習） 食物アレルギー対応代替食の実践例についての発表 第5回（講義） 保育園・小学校における食育活動の現状 第6回（演習） 保育園・小学校における食育の実践例についての発表 <b>成人期の栄養ケア</b> 第7回（講義） 運動と栄養；適切な体重コントロール法 第8回（講義） 運動の種類と期待される効果 第9回（演習） 体重コントロール法についての研究データ紹介とディスカッション 第11回（講義） 個人の生活習慣および体質に応じた栄養ケア 第12回（演習） 生活習慣病予防のための食事・運動法についての発表 <b>高齢期の栄養ケア</b> 第13回（講義） 高齢者の栄養ケア（実態と今後の課題） 第14回（演習） 高齢者の栄養ケアについてグループディスカッション 第15回 まとめ			
<b>使用教科書</b> 使用教科書なし（資料を配布します）			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 各現場でどのような栄養ケアが行われているか、情報を書籍やWeb検索サイトなどで収集し、現状を把握した上で、問題提起を行い授業に臨んで下さい。			

[授業科目名] 臨床医学特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 下方浩史
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> <b>【一般目標】</b> 管理栄養士として必要な医学的知識を修得するために、主な疾患の診断、治療、管理方法について理解する。 <b>【到達目標】</b> EBM の基本的な考え方を理解し、主要な疾患の病態、診断方法について理解し、主要な疾患の治療法・管理方法について理解して、医療チームを構成する管理栄養士として臨床の場で活動するための具体的な知識と技能を取得できるようになる。			
<b>授業の概要</b> 毎回の授業で、代表的な疾患の症例を提示し、検査値や症状から診断名を考える。また、診断に基づいて治療法、管理法を考える。ディスカッションを行いながら、医療チームの一員として活動するために必要な知識、技能、態度について取得する。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 受講態度(出席、発言、質問等) (60%)、プレゼンテーション(40%)を総合的に評価する。			
<b>授業計画 (回数ごとの内容等)</b>  第1回 授業の進め方について 第2回 糖尿病 第3回 脂質異常症 第4回 肥満症・メタボリックシンドローム 第5回 痛風・高尿酸血症 第6回 クロウン病・潰瘍性大腸炎 第7回 肝疾患その1 第8回 肝疾患その2 第9回 慢性腎臓病 第10回 急性腎疾患 第11回 貧血 第12回 循環器疾患 第12回 循環器疾患 第13回 周術期管理 第14回 高齢者の疾患と管理 第15回 授業のまとめ			
<b>使用教科書</b> 特に教科書は指定しないが、授業の際には資料となる臨床栄養学の書籍を用意しておくこと。			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 臨床医学・臨床栄養に関する教科書を復習しておくこと。			

[授業科目名] 臨床栄養学特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 下方浩史
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> <b>【一般目標】</b> 管理栄養士として必要な臨床栄養に関する知識・技能を修得する。 <b>【到達目標】</b> 栄養アセスメントと栄養療法の基本的な考え方を理解し、また、主要疾患について臨床栄養学的アプローチを理解して、これらに基づいた医療現場における管理栄養士の役割を実践するための知識と技能を取得できるようになる。			
<b>授業の概要</b> 実際の臨床の場で出会うような複雑な疾患を持つ症例について、あらかじめ用意した現病歴、症状・徴候、血液 検査成績等を提示する。問診や検査結果から、提示された症例の栄養管理やサポートの具体的な方法を考え、組み立てる。その内容についてディスカッションを行い、理解を高める。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 受講態度(輪読、発言、質問等) (60%)、プレゼンテーション等(40%)から総合的に評価する。			
<b>授業計画 (回数ごとの内容等)</b> 1回 臨床栄養に必要なコミュニケーション技法 2回 病態評価・栄養アセスメント 3回 栄養管理のプランニング 4回 栄養状態のモニタリング 5回 周術期の栄養管理 6回 低栄養者の栄養管理 7回 過栄養者の栄養管理 8回 腎不全の栄養管理 9回 糖尿病症例に対する栄養管理 10回 肝臓病(肝硬変)症例に対する栄養管理 11回 急性腎疾患症例に対する栄養管理 12回 呼吸器疾患(COPD)症例に対する栄養管理 13回 炎症性腸疾患症例に対する栄養管理 14回 高齢者疾患に対する栄養療法 15回 講義のまとめ			
<b>使用教科書</b> 特に教科書は指定しない。テーマ毎に症例を提示する。			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 臨床栄養に関する教科書を復習しておくこと。			



[授業科目名] 栄養管理プロセス特論（傷病者）		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 塚原 丘美
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 病院などの医療機関で勤務する管理栄養士としての実践的な知識を身につけ、さまざまな傷病者の病態と栄養状態を正しく評価し、新しい栄養管理方法なども考慮して、エビデンスに基づいた栄養治療計画を作成できるようにする。			
<b>授業の概要</b> 実際の症例や論文発表されている症例の栄養管理方法についてディスカッションする。その中で、傷病者の栄養管理に関する研究論文を紹介したり、ある疾患の栄養管理のトピックスについてまとめたものを発表する。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 演習時の発表内容と資料を評価し（90%）、授業態度（10%）と合わせて総合的に評価する。			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> 第 1 回 傷病者の栄養管理プロセス（NCP）の実践（講義） 第 2 回 傷病者の栄養管理プロセス（NCP）の実践（演習） 第 3 回 糖尿病の栄養管理に関するトピックス（講義と演習） 第 4 回 糖尿病の栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 1（演習） 第 5 回 糖尿病の栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 2（演習） 第 6 回 炎症性腸疾患の栄養管理に関するトピックス（講義） 第 7 回 炎症性腸疾患の栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 1（演習） 第 8 回 炎症性腸疾患の栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 2（演習） 第 9 回 脂肪肝と肝硬変の栄養管理に関するトピックス（講義） 第 10 回 脂肪肝と肝硬変の栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 1（演習） 第 11 回 脂肪肝と肝硬変の栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 2（演習） 第 12 回 がんの栄養管理に関するトピックス（講義） 第 13 回 がんの栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 1（演習） 第 14 回 がんの栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 2（演習） 第 15 回 まとめ（傷病者の栄養管理の将来） ＊演習時は、作成した資料やプレゼンテーション資料を提出する。誤りがあれば、これを修正して返却する。			
<b>使用教科書</b> 教科書は使用しない。 講義資料としてプリントを配布する。			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 臨床栄養管理に関する雑誌や研究論文などから最新の話題や新しい栄養管理方法を調べてまとめる。（180分）			

[授業科目名] 栄養管理プロセス特論（高齢者）		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 塚原 丘美
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 高齢者福祉施設や療養型病院などの医療機関で勤務する管理栄養士としての実践的な知識を身につけ、さまざまな利用者（傷病者）の栄養状態を正しく評価し、新しい栄養管理方法なども考慮して、エビデンスに基づいた栄養治療計画を作成できるようになる。			
<b>授業の概要</b> 高齢者の実際の症例や論文発表されている症例の栄養管理方法についてディスカッションする。その中で、高齢の傷病者の栄養管理に関する研究論文を紹介したり、ある疾患の栄養管理のトピックスについてまとめたものを発表する。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 演習時の発表内容と資料を評価し（90%）、授業態度（10%）と合わせて総合的に評価する。			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> 第 1 回 高齢者の栄養管理プロセス（NCP）の実践（講義） 第 2 回 高齢者の栄養管理プロセス（NCP）の実践（演習） 第 3 回 高齢者低栄養の栄養管理に関するトピックス・リハビリテーション栄養（講義） 第 4 回 高齢者低栄養（栄養欠乏症）の栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 1（演習） 第 5 回 高齢者低栄養（フレイル・サルコペニア）の栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 2（演習） 第 6 回 高齢者低栄養（低ナトリウム血症）の栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 3（演習） 第 7 回 高齢者低栄養（認知症）の栄養管理に関する臨床研究論文の紹介 4（演習） 第 8 回 褥瘡の栄養管理に関するトピックス（講義） 第 9 回 褥瘡の栄養管理に関する研究論文の紹介（演習） 第 10 回 嚥下障害の栄養管理に関するトピックス（講義） 第 11 回 嚥下障害の栄養管理に関する研究論文の紹介 1（演習） 第 12 回 嚥下障害の栄養管理に関する研究論文の紹介 2（演習） 第 13 回 高齢者周術期の栄養管理に関するトピックス（講義） 第 14 回 高齢者周術期の栄養管理に関する臨床研究論文の紹介（演習） 第 15 回 まとめ（高齢者の栄養管理の将来と地域包括ケアシステム） ＊演習時は、作成した資料やプレゼンテーション資料を提出する。誤りがあれば、これを修正して返却する。			
<b>使用教科書</b> 教科書は使用しない。 講義資料としてプリントを配布する。			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 臨床栄養管理に関する雑誌や研究論文などから最新の話題や新しい栄養管理方法を調べてまとめる。（180分）			

[授業科目名] 臨床心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 担当者未定
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 臨床心理学を学び、児童・生徒をよりよく理解し、彼らの諸問題に取り組めるようになるのが、テーマである。そして、心理学の応用によって、諸問題をよく理解し、より高度の教師としての技量を身につけることができるようになるのが到達目標である。			
<b>授業の概要</b> 臨床心理学のアセスメント法や面接法により、児童・生徒をより理解することが様々な現場で求められている。リラクゼーション法、分析的方法、行動論的方法などさまざまな心理療法の技法を会得し、それらをカウンセリングの中で活用することによって、援助できるように授業を展開する。一方、心身症、精神疾患、不登校、いじめなどの特殊な状態についても対応法などについても学ぶ。また、医療機関や福祉機関との連携などチーム・アプローチについても考える。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 毎回の小テスト（60％）とレポート（40％）の成績を基準とする。			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> 第1回 臨床心理学の基本的発想 第2回 アセスメント（1）知能検査 第3回 アセスメント（2）臨床検査、テストバッテリー 第4回 面接、カウンセリング 第5回 介入（家族、学校、職場） 第6回 ストレス 第7回 心理療法（1）自律訓練法、リラクゼーション 第8回 心理療法（2）精神分析、交流分析 第9回 心理療法（3）行動療法 第10回 心理療法（4）家族療法、その他の治療法、統合的アプローチ 第11回 臨床心理学の対象（1）心身症 第12回 臨床心理学の対象（2）精神疾患、DSM-IV、気分障害 第13回 臨床心理学の対象（3）児童・生徒の問題 不登校、いじめ、虐待 第14回 他機関との連携 医療機関、福祉機関 第15回 文献抄読			
<b>使用教科書</b> 坂野雄二・菅野 純・佐藤正二・佐藤容子 著『臨床心理学』有斐閣 ※初回の授業から講義を行うので、それまでに教科書を購入しておくこと			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 次回の講義のテーマを予告するので、教科書等で予習しておくこと。			

[授業科目名] 臨床心理学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 担当者未定
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 臨床心理学を応用して、児童・生徒の問題に取り組む演習をするのがテーマである。そしてより高度の教師として、現場の諸問題を心理学の活用によって理解できるようになるのが到達目標である。			
<b>授業の概要</b> まず、心理教育的アセスメントとは何かについて学び、さまざまなアセスメント方法、例えば、知能テスト、CMI などの臨床テスト、臨床研究にも活用できる POMS などのテストについて習熟する。次に、子どもとの面接法についてその技法を演習する。それについては、ビデオをみたり、テープを聴いたり、視聴覚教材も利用する。それらの仕上げとして模擬面接実習もする。さらに、自律訓練法や交流分析の実際についても学び、コラージュや箱庭も自分で作ってみる。その上で、摂食障害、気分障害、不登校への対応をシュミレートしてみる。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 毎回の小テスト（60％）とレポート（40％）の成績を基準とする。			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> 第 1 回 心理教育的アセスメントとは 第 2 回 心理教育的アセスメントの方法 第 3 回 心理検査の活用 第 4 回 アセスメント（1）知能検査 第 5 回 アセスメント（2）CMI、うつ尺度 第 6 回 アセスメント（3）STAI、POMS（臨床研究への活用） 第 7 回 アセスメント（4）その他のテスト、心理検査について、テストバッテリー 第 8 回 面接法 子ども面接 第 9 回 カウンセリング技法 ビデオ鑑賞、模擬面接 第 10 回 自律訓練法の実際 第 11 回 交流分析の実際 第 12 回 コラージュ・箱庭療法の実習 第 13 回 摂食障害への対応 第 14 回 気分障害への対応 第 15 回 不登校への対応			
<b>使用教科書</b> 特に使用しない。心理テスト用紙や必要な資料は配布する。			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 次回の演習のテーマを予告するので、文献などによって予習しておくこと。			

[授業科目名] 栄養疫学特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 下方浩史
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 疫学は、実験動物や培養細胞ではなく、実際の人口集団を対象として、疾病とその規定要因との関連を明らかにする科学である。そのため栄養と生活習慣病（がん、脳血管疾患、心疾患など）との関連性などを研究する場合に欠かすことのできない研究手法である。この科目では疫学用語を理解できること、疫学のための統計用語を理解できること、基本的研究のデザインの作り方を理解できること、食事調査の方法論を理解できることを目標にする。			
<b>授業の概要</b> 上記の目標達成のため、1～6の講義および7以降は具体的事例の紹介をして、栄養疫学をより具体的に理解できるように、授業を進める。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 受講態度(輪読、発言、質問等)(60%)、プレゼンテーション等(40%)から総合的に評価する。			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> 第1回 栄養疫学とは【講義】 第2回 記述疫学【講義】 第3回 疫学のための統計用語、【講義】 第4回 研究デザイン【講義】 第5回 食物摂取の変動要因と食事調査の方法【講義】 第6回 食物摂取頻度調査票【講義】 第7回 高齢者の低栄養の疫学【演習】 第8回 高齢者に多い疾患とその疫学：認知症【演習】 第9回 高齢者に多い疾患とその疫学：その他の疾患【演習】 第10回 ビタミンB <sub>1</sub> 欠乏症（脚気）の疫学【演習】 第11回 がんの疫学【演習】 第12回 口腔機能の疫学【演習】 第13回 肥満の疫学【演習】 第14回 循環器疾患の疫学【演習】 第15回 統計用語Rによる栄養疫学解析入門【演習】			
<b>使用教科書</b> 適宜プリント、資料を配布する。			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 各授業で解説する疾患について、教科書等で事前に理解しておくこと。			

[授業科目名] 栄養疫学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 下方浩史
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 疫学は、実験動物や培養細胞ではなく、実際の人口集団を対象として、疾病とその規定要因との関連を明らかにする科学である。そのため栄養と生活習慣病（がん、脳血管疾患、心疾患など）との関連性などを研究する場合に欠かすことのできない研究手法である。この科目ではフリーソフトの統計言語Rを用いて栄養疫学研究に必要な統計知識を得て解析技術を習得し、基本的な統計解析が出来るようになることを目標にする。			
<b>授業の概要</b> 各自のノートパソコンに統計言語Rをインストールし、実際にRを使いながら栄養疫学研究のための統計技術を取得する。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 受講態度(出席、発言、質問等)(60%)、プレゼンテーション等(40%)を総合的に評価する。			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> 1回 Rの概要とインストール 2回 データベースとEZRの基本操作 3回 条件分岐と簡単な統計解析 4回 欠損値の処理 5回 データの傾向を知る 6回 名義変数の解析 7回 模擬データ提示と解析 8回 模擬解析結果プレゼンテーション 9回 サンプルサイズ 10回 一元配置分散分析 11回 3群以上の比較 12回 傾向性の検定 13回 相関と回帰 14回 ロジスティック回帰の実際 15回 ロジスティック回帰データ解析			
<b>使用教科書</b> 適宜資料を配布する。			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 学習した内容を必ず復習する。演習問題を復習課題とする。			

[授業科目名] 食教育学特論（栄養教育） Linking Reserch, Theory and Practice		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 安達内美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 環境やライフスタイルとの関連を重視して人々の食をとらえる「食生態学」を視野・視点に、健康教育学等の理論をふまえ、国内外の実践事例を活用しながら、栄養教育の基本的な理論や方法論がわかり、その展開ができるようになることを到達目標とする。 具体的には、栄養教育（Nutrition education and Promotion）とは何か、現代社会で、何が期待されているのか、学生自身がそれぞれの専門性を活かして、このダイナミックなネットワークのどこをどう担っていくのか等について理解・考察できるようになることを到達目標とする。人間の尊厳や地域性を重視する“新しい栄養教育”のリーダー（栄養教諭を含む）としての実践観やセンスを身につけることができるようになることを到達目標とする。			
<b>授業の概要</b> 栄養教育の理論と実践（国内外の実践事例）のキャッチボールで進める。毎回、栄養・食・生活・環境の現状やその改善・向上のために進められてきた実践事例について情報の共有、関連する栄養教育の理論と展開、評価や課題等について各事例の特徴を活かしながら検討をする。 栄養教育の理論と実践を結ぶ理論展開について、I.Contentto 博士の“Nutrition Education “を活用する。 なお、授業は講義と演習を複合的に実施する。			
<b>学生に対する評価の方法</b> 討論や毎回のレポート70%、最後のレポートが30%程度の割合で、総合的に評価する。			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> 第 1回 栄養教育における課題 第 2回 食物選択と食行動変容の概要 第 3回 栄養教育概論：実行に移すための「なぜ」と「どのように」を引き出す 第 4回 理論と研究の基礎：気づきを増やし、動機づけを高める 第 5回 理論と研究の基礎：実行に移す力を引き出す 第 6回 理論と研究の基礎：実行に移すための環境的サポートを促進する 第 7回 ニーズと行動分析：プログラムのねらいとなる行動・実行の明確化 第 8回 プログラムのねらいとする行動・実行に関する潜在メディアーターの特定 第 9回 理論、教育理念、プログラム構成要素の選択 第 10回 教育ゴールと目標を述べ、プログラムのねらいとなる行動と実行の潜在メディアーターに働きかける 第 11回 理論に基づく教育的戦略を設計し、行動を動機づける潜在メディアーターに働きかける 第 12回 理論的な教育的戦略を設計し、実行に移す力を引き出す潜在メディアーターに働きかける 第 13回 実行の潜在的な環境メディアーターに働きかけるような戦略を設計する 第 14回 理論に基づく栄養教育のための評価を設計する 第 15回 振り返り、まとめ			
<b>使用教科書（研究室で保有している本の貸し出し可）</b> Isobel R. Contento, Ph.D.; Nutrition Education (2007) Jones and Bartlett Publishers （参考書 足立己幸ら監訳、安達内美子ら訳；これからの栄養教育論-研究・理論・実践の環-）			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 毎回、教科書の該当章を読み、章末の演習に取り組んだ上、授業に臨む。学生各自が実践・研究の場で抱える課題と毎回の授業内容につなげ共有し、組み合わせることで、解決方法を共に模索したい。その過程を通じて、栄養教育の世界を広げ、授業後は各自の実践・研究に活かしていくことを期待している。 従って、食の専門家としての使命と責務を自覚し、問題意識をもって授業での課題に取り組んでほしい。			

[授業科目名] 食教育学特論（公衆栄養） Community Nutrition		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 安達内美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> <p>食教育の目的（人々がそれぞれの生活の質と環境の質のよりよい、持続可能な共生）を達成するためには、PDCA サイクルに基づいた栄養教育マネジメントが行われる必要がある。ここでは、目的を達成するための栄養教育マネジメントを健康増進の場（公衆栄養）で実践できるようになることを到達目標とする。</p> <p>具体的には、公衆栄養の学習者となる個人および集団（Community）の健康・栄養状態、食行動、食態度、食知識、食環境について、情報収集・分析するアセスメントに始まり、プログラムの計画・実施・評価・見直しといった、PDCA サイクルに基づくマネジメントがわかることを到達目標とする。特に、生涯に渡る食習慣の基礎を作る幼児・児童・生徒に焦点を当て、具体例をあげて考察できるようになることを到達目標とする。</p>			
<b>授業の概要</b> <p>学校教育の中で実施される幼児・児童・生徒の食育（食に関する指導）の実践例を中心に、個人や集団の健康と食の課題の解決のために用いられる行動科学理論・モデルについて、複数の文献・資料より考察して、理解を深める。</p>			
<b>学生に対する評価の方法</b> <p>討論や毎回のレポート60%、最後の課題（発表）40%程度の割合で、総合的に評価する。</p>			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> <p>第1回 健康、食生活、食環境の現状と課題（講義）  第2回 食行動変容と栄養教育（講義）  第3回 幼児の栄養教育プログラムのマネジメント（講義）  第4回 事例研究：幼児の栄養教育プログラムのマネジメント（演習）  第5回 児童・生徒の栄養教育プログラムのマネジメント（講義）  第6回 児童・生徒を取り囲む食環境と栄養教育（講義）  第7回 事例研究：栄養教諭が実施する児童の栄養教育プログラムのマネジメント（演習）  第8回 事例研究：栄養教諭が実施する生徒の栄養教育プログラムのマネジメント（演習）  第9回 地域住民の栄養教育プログラムのマネジメント（講義）  第10回 事例研究：地域住民の栄養教育プログラムのマネジメント（演習）  第11回 高齢期の栄養教育プログラムのマネジメント（講義）  第12回 事例研究：高齢期の栄養教育プログラムのマネジメント（演習）  第13回 栄養教育プログラムの立案（演習）  第14回 栄養教育プログラムの立案（演習）  第15回 発表 振り返り、まとめ</p>			
<b>使用教科書</b> <p>授業内で文献、資料を配布する</p>			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> <p>各ライフステージの身体的、精神的、社会的特徴を十分に理解していることが必要。  学生各自が実践・研究の場で抱える課題を持ち込んで、毎回の授業内容につなげ共有し、組み合わせることで、解決方法を共に模索したいと考えているが、文献・資料を配布した場合は、事前に読んでおくこと。授業後は授業で学んだことを各自の実践・研究に活かしていくことを期待している。  また、食の専門家としての使命と責務を自覚し、問題意識をもって授業での課題に取り組んでほしい。</p>			



[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
国際栄養学特論 Global Nutrition		講義・演習	佐藤都喜子
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
2	選択		
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> <p>世界的視野で、栄養・食・健康問題や、それらの改善・向上への活動の現状と課題について理解し、学生自身が自分の専門性や特徴を活かしてどうかかわるかについて考える場にする。人間の尊厳、ジェンダー、リプロダクティブ・ヘルス、文化や価値観の多様性、食生態の視野・視点を重視し、人々の生活の質(QOL)と環境の質(QOE)のより良い共生をめざす栄養・食活動について理解できるようになり、かつ問題解決の方策を提示できるようになることを到達目標とする。</p> <p>将来国内に仕事の間を得たいと考えている人にとって、栄養学修士の素養として必須の視野・視点・基本スキルを得ることができ、将来、国際栄養分野での活動を希望する学生にとっては、学内外（国外も）の関連する仲間・組織・研修等ネットワーク参加できるようになることも到達目標となる。</p>			
<b>授業の概要</b> <p>授業担当者自身が、地理学や生態学の理論を基礎とし、多様な地域で実施してきた（計画・実施・評価・環境づくり・人材養成・プロジェクト構築等）事例を紹介し、授業を進める。映像や現地での教材も活用し、国際栄養の実態と課題を学生と共有できるようにする。</p>			
<b>学生に対する評価の方法</b> <p>討議への参加度（50%）、レポート（50%）の割合で、総合的に評価する。</p>			
<b>授業計画（テーマ、基礎となる理論、教材、授業展開の方法等）</b>			
1回	（講義）	オリエンテーション：国際栄養活動に取り組むための新たな視点 栄養への世界的関心とコミットメント	
2回	（講義）	世界の栄養・食の現状とジェンダーへの期待	
3回	（講義・演習）	ジェンダーと食・栄養	
4回	（講義・演習）	ライフサイクルとエンパワメントー子ども・女性の健康の視点から	
5回	（講義・演習）	人権としての食の営み	
6回	（講義・演習）	世界各地の栄養・食の問題：伝統文化と食環境	
7回	（講義・演習）	世界各地の栄養・食の問題：グローバル化と食環境	
8回	（講義）	世界各地の栄養・食の問題とその要因構造	
9回	（講義）	世界各地の栄養・食問題の要因構造を明らかにするアセスメントとその方策	
10回	（講義・演習）	企画から評価に至るまでの栄養・食のプロジェクトサイクルマネジメント	
11回	（講義・演習）	ライフスキルと住民参加（実践例トンガ）	
12回	（講義・演習）	エフィカシー（実践例ヨルダン）	
13回	（講義・演習）	キーフーズ（実践例ネパール）	
14回	（講義・演習）	「ポジティブ・ディービアンス（良い逸脱）」（実践例ベトナム）	
15回	（講義）	地域性を活かした栄養・食の教材開発と評価	
<b>使用教科書</b> <p>履修登録者に事前に講読すべき文献を連絡。</p>			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> <p>国際栄養活動の必須条件でもある学習者参加・学習者主体・学習者発信重視の授業展開をしたいと希望している。そのため、予習として購読すべき文献を事前に知らせるので、討議に参加できるように読み込んでくること。</p>			

[授業科目名] 食行政特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 五十里 明
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> <p>予防医学において、「食」の重要性は万人の認めるところであるが、現代社会における「食」に関する情報は玉石混交状態であり、正しい情報を理解しておくことは管理栄養士として極めて重要と考える。</p> <p>「食行政特論」では、「食」に関連する様々な課題を取り上げ、管理栄養士として「食」に関する情報の背景を把握することをテーマとし、それらを科学的に理解し、消費者に分かりやすく解説できるようになることを到達目標とする。</p>			
<b>授業の概要</b> <p>食品衛生法、JAS法、食育基本法、健康増進法、食品表示法、食品安全基本法等の法律の理解とともに、「食」に係わる現状と課題について学ぶ。また、各受講生に与えられた課題についてプレゼンテーションを行い、ディスカッションを加えて、「食」の理解を一層深めて行く。</p>			
<b>学生に対する評価の方法</b> <p>講義への参画態度 (20%)、各受講生に課せられた課題について、その発表した内容 (40%)、講義後の課題レポートの内容 (40%) から総合的に評価する。</p>			
<b>授業計画 (回数ごとの内容等)</b> 第 1 回 講義：食行政論 (オリエンテーション・各受講生の課題の決定) 第 2 回 講義：世界の食糧事情と課題 第 3 回 講義：日本の食糧事情と課題 第 4 回 演習：食料自給率に関するディスカッション 第 5 回 講義：食に関する行政組織の現状と課題 第 6 回 講義：食育基本法の理解 第 7 回 講義：健康増進法の理解 第 8 回 講義：食品の安全性 (O157・BSE) 第 9 回 演習：食の流通に関するディスカッション 第 10 回 演習：環境問題に関するディスカッション 第 11 回 講義：食品の表示の変遷と課題 第 12 回 演習：食品表示と安全に関するディスカッション 第 13 回 講義：学校給食の現状と課題 第 14 回 講義：地域包括ケアと管理栄養士の役割 第 15 回 演習：まとめのディスカッション			
<b>使用教科書</b> その都度プリントを配布する。			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 普段から、新聞やテレビニュースなどを活用し、世界や日本の社会情勢についての情報を「食」に限らず得ておくこと。次回の授業範囲を予習し、講義の内容を復習すること。			

[授業科目名] 食品機能学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 和泉秀彦
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 食品は人間の生存を支える重要な因子の一つである。我々の健康維持は食品抜きにして考えることはできない。従来、食品についての価値評価は栄養面からみた一次機能と、嗜好面からみた二次機能とからなされてきたといえる。近年、食品およびその成分が生体防御、疾病予防と回復、体調リズム調節、肥満防止、老化の抑制などに深く関与していることが明らかになってきた。それらの食品の機能を三次機能と称している。ここでは、その三次機能を深く理解できるようになることを到達目標とする。 この授業を通して、栄養科学、特に食品に関する諸問題を提起し、それを解決する能力を修得して頂きたい。			
<b>授業の概要</b> この特論では、五大栄養素（炭水化物・脂質・タンパク質・ビタミン・無機質）についての英文を購読し、さらに様々な三次機能を中心に食品の機能性について講義する。また、乳幼児から学童期に多い疾患である食物アレルギーについて、発症機構とその抑制についても解説する。			
<b>学生に対する評価の方法</b> レポート（50%）およびテスト（50%）により評価する。			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> 第1回 炭水化物の化学（英文講読） 第2回 炭水化物の機能（英文講読） 第3回 脂質の化学（英文講読） 第4回 脂質の機能（英文講読） 第5回 タンパク質の化学（英文講読） 第6回 タンパク質の機能（英文講読） 第7回 ビタミンの機能（英文講読） 第8回 ビタミンの機能（英文講読） 第9回 食品の三次機能（抗酸化機能） 第10回 食品の三次機能（消化促進機能） 第11回 食品の三次機能（難消化・吸収阻害と微生物活性機能） 第12回 食品の三次機能（酵素阻害機能） 第13回 食品の三次機能（免疫系におよぼす機能） 第14回 まとめと試験 第15回 試験に対するフィードバック、及び質問が多かった事項の解説			
<b>使用教科書</b> 必要に応じてプリントを配布する。			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> 英文は授業で購読する内容を予め読んで理解しておき、授業は内容をもう一度確認しておくこと（180分）。また、機能性の講義を理解するためには、基礎的な食品学および栄養学の知識が必要となる。			

[授業科目名] 食品機能学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 和泉秀彦
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> <p>この演習では、『食品機能学特論』で学んだ抗酸化機能、消化促進機能、難消化・吸収阻害と微生物活性機能、脂質関連代謝機能、酵素阻害機能、免疫系におよぼす機能、神経系におよぼす機能、さらに乳幼児から学童期に多く発症する食物アレルギーに関連する論文を読み、その内容について討論することにより、食品の機能性について理解できるようになることを到達目的とする。</p> <p>また、特別研究（修士論文作成）の参考に、実験手法や結果をまとめ、考察できるようになることを到達目標とする。さらに、この授業を通して、栄養科学、特に食品に関する諸問題を提起し、それを解決する能力を修得して頂きたい。</p>			
<b>授業の概要</b> <p>この演習では、まず文献の読み方およびデータの解釈の仕方を解説する。その後、各自で論文を選択し、その論文について背景・結果・考察を中心に内容を紹介するとともに、その内容について討論する。</p>			
<b>学生に対する評価の方法</b> <p>文献の理解度（50%）およびプレゼンテーション（50%）により評価する。</p>			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> <p>第1～3回 英語論文の読み方、プレゼンテーションについての解説  第1回 文献の構成について  第2回 データの読み方について  第3回 プレゼンテーション用媒体の作成について</p> <p>第4～15回 食品の機能性に関する論文の紹介と討論  第4回 抗酸化機能（背景）  第5回 抗酸化機能（結果・考察・討論）  第6回 消化促進機能（背景）  第7回 消化促進機能（結果・考察・討論）  第8回 難消化・吸収阻害と微生物活性機能（背景）  第9回 難消化・吸収阻害と微生物活性機能（結果・考察・討論）  第10回 酵素阻害機能（背景）  第11回 酵素阻害機能（結果・考察・討論）  第12回 免疫系におよぼす機能（背景）  第13回 免疫系におよぼす機能（結果・考察・討論）  第14回 食物アレルギーに寄与する機能（背景）  第15回 食物アレルギーに寄与する機能（結果・考察・討論）</p>			
<b>使用教科書</b> <p>必要に応じてプリントを配布する。各自が作成したプレゼンテーション用媒体を使用する。</p>			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> <p>食品機能学特論で得た知識をより深めるために、多くの英語の食品機能に関する論文を読んで理解すること（各回準備に180分）。</p>			

[授業科目名] 食品安全学特論		[授業方法] 講義・演習	[授業担当者名] 岸本満
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> <p>わが国では食品安全基本法等食品安全を確保するための法律が整備され、食品安全委員会をはじめとする実行組織も設置された。フードチェーンの各現場ではリスクアナリシスの理念・方法論を理解し実践する人材が求められておりその人材育成は急務である。2020年を目途にわが国ではHACCPによる工程管理が義務化される予定であり、従事者の意識改革を含めた食品安全の教育訓練の徹底も重要な課題となっており、現場指導者の育成も重要かつ急を要している。</p> <p>この授業は食品の安全保障に関する専門知識を習得し、食品業界で安全管理の担い手として必要なHACCPのスキルを身につけ、加えて課題の発見、分析、問題解決、意思決定等の実行力を高めることも目標としている。本履修により、飲食に基づく健康危害要因を分類しそれらの特性を解説できるようになる。さらにリスクアセスメント、特に微生物学的リスクアセスメントの手法を理解し、アセスメントデータを正しく取り扱えるようになる。また、GAP、GMP、PRP、ISO22000、FSSC22000などの食品安全確保システムについて理解を深め、これらシステムの有用性や特徴について理解、説明できるようになる。本授業は演習を多く取り入れ、調査・取材、文書作成、プレゼンテーション、討議を重視するので、これらのスキルも習得することができる。</p>			
<b>授業の概要</b> <p>健康被害や社会不安を引き起こす要因や制御法、またマネジメントシステムを学ぶ。食品安全上特に重要な微生物制御に関する課題が中心となる。講義、演習を交互に行うことで理解と興味を深めていく。講義のあと参考書籍や資料を示すので、次回までに学習し、発表の準備をする。</p>			
<b>学生に対する評価の方法</b> <p>発表内容（提出課題の内容）を5段階で評価する。  課題提出が90%以上でなければならない。</p>			
<b>授業計画（回数ごとの内容等）</b> 第1回（講義）安全性にかかわる危害因子について 第2回（演習）ウイルス・細菌・化学物質・異物等の健康危害要因に関する発表、討議 第3回（講義）食品安全とリスクアナリシス（特にリスクアセスメント）について 第4回（演習）微生物学的リスクアセスメントに関する発表、討議 第5回（講義）食品微生物学1）病原微生物、殺菌法等について 第6回（演習）病原微生物、発酵、腐敗、食中毒、殺菌等に関する発表、討議 第7回（講義）食品微生物学2）予測微生物学について 第8回（演習）予測微生物学の例 第9回（演習）微生物学的リスクアセスメントの例 第10回（講義）食品安全確保システム（GAP, GMP, PRP）について 第11回（演習）GAP, GMP, PRPに関する発表、討議 第12回（講義）食品安全確保システム（HACCP, ISO9000/22000）について 第13回（演習）HACCP, ISO9000/22000, トレーサビリティ、リコール等に関する発表、討議 第14回（講義）食品の安全性評価 第15回（演習）農薬、食品添加物、動物薬、化学物質、遺伝子組み換え食品の安全性評価に関する発表、討議			
<b>使用教科書</b> <p>必要に応じて書籍を指示、またプリントを配布する。</p>			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> <p>基本として「食品の安全性」（東京教学社）を事前に目を通しておくこと。  「食と健康」、「食品衛生研究」、「HACCP」などの食品衛生に関する専門雑誌に毎月目を通すと良い。</p>			

[授業科目名] インターンシップ I・II・III		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 北川元二
[単位数] 各2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> <b>【一般目標】</b> キャリアパスに応じた実践の場で、栄養科学の高度な専門的知識・技能・態度を修得するとともに、コミュニケーション能力を涵養する。 <b>【到達目標】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現場における管理栄養士の役割を理解する。</li> <li>・現場で必要とされる知識、技能、態度を修得する。</li> <li>・スタッフとのコミュニケーションの重要性を理解し、実践できる。</li> <li>・自分の適性を模索し、自らのキャリアプランをイメージできる。</li> <li>・自らのキャリアパスについて、卒業するまでに「何をすべきか」考える。</li> </ul>			
<b>授業の概要</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自らの専攻や将来の職業に関連した職業体験(研修)を行うことにより、理論を実体験に結びつけるようにする。</li> </ul>			
<b>学生に対する評価の方法</b> <p>レポートの内容について、①現場における管理栄養士としての知識、技態度(1/3)、②チームの一員として活動できる実践能力(1/3)、③コミュニケーション能力(1/3)、等の修得度を中心に評価する。</p> <p>なお、認定単位数は4週間のインターンシップを2単位として、インターンシップの期間並びに成果の状況を加味して認定を行う。</p> <p>また、栄養教諭専修免許取得に関しては、各研究領域の食育、食品開発、食品安全、行政機関などでのインターンシップについて、教職課程の「栄養に関わる教育に関する科目として」単位を認定する。</p>			
<b>授業計画(回数ごとの内容等)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各領域の指導教員および実習先の担当者との相談の上、実習先、実習内容を選択する。実習期間は4週間で1つの区切りとし、4週間のインターンシップで2単位とする。1カ所で12週間実習をしてもよいし、4週間ずつ複数の実習先を選択しても良い。</li> <li>・インターンシップの実習先としては、  「人間栄養」領域・・・他の大学、国立健康栄養研究所などの研究機構、企業の研究所  「臨床栄養」領域・・・病院、診療所、介護老人保健施設、介護老人福祉施設  「食行動・食環境」領域・・・保育園、幼稚園、学校、保健所  「食品機能・食品安全」・・・企業の研究所、研究機構、保健所、検疫所・県衛生研究所の行政機関  「海外研修」(カリフォルニア大学デービス校など)</li> <li>・栄養教諭専修免許取得に関しては、各研究領域の食育、食品開発、食品安全、行政機関などでのインターンシップが望ましい。</li> </ul>			
<b>使用教科書</b> 特に教科書は指定しない。内容に応じて参考図書、関連ウェブサイトを示される場合がある。			
<b>自己学習の内容等アドバイス</b> インターンシップ先の業務内容等についてあらかじめ把握しておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
特別研究		演習	北川元二、五十里明、池田彩子、井澤一郎、和泉秀彦、岡田希和子、岸本満、下方浩史、塚原丘美、藤木理代、山中克己、安達内美子、立花詠子、山田千佳子
[単位数]	[必修・選択]	[備考]	
8	必修		
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> <b>【一般目標】</b> 研究者および高度専門職業人としての基本的な研究能力を修得するために、栄養科学に関する研究（実験、調査等）を遂行し、修士論文を作成する。 <b>【到達目標】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 栄養科学の研究者として必要な倫理観、栄養科学の基礎知識、論理的な研究手法、英語論文の読解力、を修得する。</li> <li>● 高度専門職業人として社会貢献できる基礎的な知識や技能を修得する。</li> <li>● 栄養科学の実践を重んじ、地域貢献に加えて、国際的な視野を持ち、健康科学の発展に寄与できる基礎的な技能・態度を修得する。</li> </ul>			
<b>授業の概要</b> 授業は、個別指導とゼミナール形式で行う。個別指導においては、各々が設定した研究課題について必要な実験、調査を遂行する過程で、科学的・論理的な問題解決法についての指導を行う。それと同時に、関連する論文購読を通して論文の読み方、書き方の指導を行う。また、ゼミナールでは各自が自分のテーマと関連した研究論文を検索し発表する。発表後は内容を検討しながら個々の問題を明らかにし、修士論文作成まで指導を行っていく。			
<b>[使用教科書]</b> 指導教員より適宜紹介をしていく			
<b>[学生に対する評価の方法]</b> 修士論文、研究への姿勢、プレゼンテーション力、論文読解力、学部学生への指導力など総合的に評価を行う。			
<b>[授業計画]</b> オリエンテーション・個人指導・ゼミナール等を適宜実施していく。			
<b>[自己学習の内容等アドバイス]</b> 2年間の研究成果が導き出せるよう、積極的に取り組むこと。 当該分野以外の幅広い教養を養うため、積極的に勉強してください。			

[授業科目名] 博士特別研究		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 北川元二、五十里明、池田彩子、井澤一郎、 和泉秀彦、岡田希和子、岸本満、下方浩史、 塚原丘美、藤木理代、山中克己、 安達内美子、立花詠子、山田千佳子
[単位数] 8	[必修・選択] 必修	[備考]	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> <b>【一般目標】</b> 独立した研究者・高度専門職業人としての研究能力を修得するために、栄養科学に関する研究（実験、調査等）を遂行し、博士論文を作成する。 <b>【到達目標】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 栄養科学の研究者として、必要な倫理観、栄養科学の知識、論理的な研究手法、英語論文の読解力、英語論文執筆能力を修得する。</li> <li>● 高度専門職業人として社会貢献できる知識や技能を修得する。</li> <li>● 栄養科学の実践を重んじ、地域貢献に加えて、国際的な視野を持ち、健康科学の発展に寄与できる技能・態度を修得する。</li> </ul>			
<b>授業の概要</b> 研究課題を決定して、課題遂行のための計画を立案、その研究成果を指導教員による個別の研究指導等を通じて、博士学位論文に纏め上げるための科目として位置づけている。 具体的には、各教員の指導のもと、研究課題の設定、研究計画の立案、データ収集、データ分析、データ実験、研究方法の展開等を行う。 また、専門分野の最新の研究成果が掲載された学術論文の精読を通じて、自らの研究内容との比較検討も行う。 また、英語論文の講読・執筆、国際学会での発表などを通じて、国際的に活躍するための語学力の向上に努める。			
<b>[使用教科書]</b> 指導にあたる教員より適宜紹介をしていく。			
<b>[学生に対する評価の方法]</b> 博士論文、研究への姿勢、プレゼンテーション力、学部学生への指導力など総合的に評価を行う。			
<b>[授業計画]</b> オリエンテーション・個人指導・ゼミナール等を適宜実施していく。			
<b>[自己学習の内容等アドバイス]</b> 研究成果が導き出せるよう、積極的に取り組むこと。 当該分野以外の幅広い教養を養うよう、積極的に勉強すること			